

第2日目 2019年9月15日(日)

午後の部 14:00~16:45

公開シンポジウム(日本語・英語)

高齢社会における生/死と家族

Life/Death and Family in Aged Societies

企画担当: 山根 真理(愛知教育大学)

佐々木 尚之(大阪商業大学)

### 【企画趣旨】

第9期理事会最終年のシンポジウムは、人生の後半に焦点をあてた国際シンポジウムである。20世紀後半に世界の多くの地域で大衆長寿社会が実現し、成人期の親子関係、医療高度化、長期にわたる介護、相続と継承、葬送と墓など、多くの事柄において、先行世代が経験したことの無い経験をもたらしている。シンポジウムでは、東アジアと欧米に視野を広げ、国際比較視点をもって「高齢社会における生/死と家族」のテーマを考える。

近代化と家族変動を捉える比較変動論を論じた落合(落合、2014)によると、ヨーロッパ地域では第1次人口転換の時期に「主婦化」が生じ、第2次人口転換の時期に個人化、家族多様化と並行して「脱主婦化」が生じ、並行して高齢社会に対応した社会システム構築の試みがなされてきた。しかしながら、短期間で近代化の道をとどった(圧縮近代、Chang, 2010)アジア諸社会では高齢社会に対応した社会システム構築は不徹底で、「家族主義的個人化」とみなしうる現象が生起している。東アジアに位置し、本シンポジウムで議論の焦点となる二地域、日本と韓国では近代化以前の基層として直系制家族があり、近代化のなかで夫婦制家族への移行と家族の個人化を経験した。このような家族変動過程は、高齢期にある人の人生を中心に見たとき、どのような現れ方をしているだろうか。高齢者を中心に見た人生の出来事と家族関係は、それまでの人生経歴を反映して多様であり、関わる人も多く複雑である。人生の出来事に関する価値の、関与者間の葛藤—たとえば世代間、ジェンダー間、個人・家族・専門家間の葛藤—はどのように現れ、どのような意思決定がなされているだろうか。それらのあり方に世界諸地域で、どのようなバリエーションが見られるだろうか。またそこに、社会階層による偏差がどのように現れるだろうか。さらに、人生の出来事に関するシステム構築にどのような選択肢があるだろうか。

シンポジウムでは三人のパネリストに、それぞれ異なる側面から「高齢社会の生/死」について論じていただく。一人目のパネリストは韓国の高齢者論の専門家(社会学・人口学)、朴京淑氏である。朴報告は「ケア」に焦点をあて、東アジアの家族変動の文脈で家族ケアの持続可能性について論じられる。二人目のパネリストはヨーロッパの福祉事情に通じ広い視野で介護・福祉システムへの提言を続けておられる医療・福祉ジャーナリストの浅川澄一氏である。浅川報告は、欧米の終末期医療とケアを焦点とし、当事者を第一にすえた「死の質」について論じられる。学会員パネリストとしては、「墓と葬送」に関するテーマの専門家であり米国の家族事情にも明るい安藤喜代美氏に登壇いただく。安藤報告の焦点は、日本の家族変動のなかの「新しい墓制・葬送」である。三報告を受けて、討論者の西下彰俊氏に、高齢者、介護のテーマに北欧、アジア諸国との比較視点をもって取り組まれてきた家族社会学者の立場から議論を深めていただく。

シンポジウムの議論を通して、人口転換の帰結として世界諸地域で生じている、切実で新しい経験について認識を共有し、家族社会学の観点から洞察を得、発信することを目指す。

Chang, Kyung-Sup, 2010, *South Korea under Compressed Modernity*, Routledge.

落合恵美子, 2014, 「近代世界の転換と家族変動の論理 —アジアとヨーロッパ」『社会学評論』Vo.64, No.4 : 533-552.